

3

氏 名	渡部裕太
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第526号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	焼跡文学論—語りえない〈空白〉を語ること—
審 査 委 員	(主査) 石川 巧 (立教大学大学院文学研究科教授) 金子明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 佐藤 泉 (青山学院大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

- 序 焼跡文学とは何か
- 第一部 梅崎春生の焼跡文学
 - 一章 肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜆」論
 - 二章 飢えと混乱を生きること——梅崎春生「飢えの季節」論
 - 三章 境界線と構図の更新——梅崎春生「囚日」「偽卵」「黄色い日日」論
 - 四章 「同類」を「憫笑」する——梅崎春生「山名の場合」論
- 第二部 焼跡文学の諸相
 - 一章 “墮ちる”の意——平林たい子「墮ちた人」論
 - 二章 都市表象としての身体——武田泰淳「もの食う女」論
 - 三章 切れ端の愛——織田作之助「夜の構図」論
- 第三部 焼跡の記憶と継承
 - 一章 忘却と想起のジレンマ——今西祐行「ヒロシマのうた」論
 - 二章 〈国家〉を越境する〈家族〉——井上ひさし「握手」論
 - 三章 模倣による自己表現——太宰治「トカトントン」論
- 結語にかえて
- 参考文献／初出一覧

(2) 論文の内容要旨

本論は、戦後文学研究の一方法として〈焼跡文学〉という概念を提起することで、敗戦後日本の文学状況、およびそこに登場した戦後派作家の眼差し方を捉え直す試みである。本論でいう〈焼跡文学〉とは、焼跡の空間的／イデオロギー的な空白を内在化させている文学、すなわち、空白という状態そのものが登場人物たちの意識を拘束し、その空白に向けて言葉を紡いでいこうとする試みである。

本論では、〈焼跡文学〉を考えるための手がかりとして、第一部で梅崎春生という作家を焦点化した。梅崎春生は、戦後社会をどのように描くことができるかを真摯に考え、その文体や語り口が常に〈偽〉や〈嘘〉の意識を孕んでしまうことに自覚的だった作家である。この作家が、戦後日本を語るためにどのような遍歴を辿り、どのような試行錯誤を重ねたかを考えることは、〈焼跡文学〉という概念を明確にするうえで回避できない問題だったということである。

第一部・第一章で論じたのは、いわゆる市井物と称される作品のひとつ「蜆」である。これまでの研究において、「蜆」はニヒリズムやエゴイズムを肯定する物語として捉えられてきた。だが、本論では語りの構造を精緻に分析することによって人々のニヒリズムやエゴイズムを描きつつ、それを相対化する契機を模索していることを説いている。第二章では「飢えの季節」を論じた。第一章の問題をさらに突き進め、主人公の認識がエゴイズムやニヒリズムといった個の問題から社会全体の「構図」的問題へと移行していることを詳述し、焼跡の生活にあってなお欲望を棄て切れず煩悶する主人公の内面を明らかにした。第三章では、作家としてのスランプに陥った梅崎春生が「同じ材料」を使い回すかたちで執筆したとされる「囚日」「偽卵」「黄色い日日」の三作品を取り上げている。これらはストーリー上のつながりはないものの、

犯罪に手を染めた友人や「脳病院」の見舞い体験を素材にして、自身のなかにある「嘘」や「ある確実な何か」を掴み損ねたという感覚を描いている。上滑りしていく表現ではなく、自分のなかに錨を下すような「実質のある重い言葉」で小説を書きたいと考えていた梅崎春生の思索的な歩みがそのまま作品に結晶している。本論では、そうした問題意識から出発し、梅崎春生がスランプに陥った原因とその時期の試行錯誤の軌跡を追っている。第四章では、梅崎がスランプを脱出して「嘘」ではないと思える表現を獲得する過程を描いたとされる「山名の場合」に着目し、この作品の文体がそれ以前のものとどのように違っているのか、梅崎春生の新しい文体が同時代に登場した他の作家たち、あるいは、戦後日本文学そのものにどのような影響を与えたのかを考察した。

第二部では、梅崎春生が問題化した「嘘」や「偽物」という意識を共有する同時代作家として平林たい子、武田泰淳、織田作之助に焦点をあて、彼らの文学もまた梅崎春生と同様、作品世界に「語り得ない空白」があることを指摘している。第二部第一章では、戦後の平林たい子作品としては異色とされる「堕ちた人」に注目し、作品の背景に左翼の思想放棄問題、日本人におけるナショナル・アイデンティティ問題が横たわっていることに着目しながら論を進めた。民族／国家／文化といった問題系と、時代に伏流するイデオロギーのありようが分かちがたい相関関係で結ばれ、個をのみ込んでいくことを論じている。第二章では、武田泰淳「もの食う女」を対象としている。この作品が雑誌「玄想」の特集企画に沿って書かれたものであること、単行本所収時には「街の人間玄想」を題としていたことなどを拠り所として作品を読解し、戦後の街とそこに生きる人間を描く試みであったはずの本作が、結末において、戦後という状況と対峙する言葉を獲得しなければ人間を描くことができないという認識に到達することを問題化した。第三章では、戦時下を舞台に設定した織田作之助の「夜の構図」を分析した。作者の織田作之助は、戦後をいかに描くかという問題に苦悶し、敢えて戦時下を生きる人々を登場人物とする「夜の構図」を書きあげる。そこには、戦後的認識をもって戦時下を逆照射するという戦略的意図が内在しているのである。本論では、戦後的ニヒリズムをもたらす契機がすでに戦時下において用意されていたことを論じたうえで、戦中と戦後をひとつの連続した光景として捉えている。

第三部では、戦後の焼跡という問題がどのようなかたちで記憶・継承されたのか、焼跡をどのように伝えることが可能かという問題が論じられている。具体的には、現在、小学校、中学校、高等学校の国語教科書に掲載されている文学作品のなかから焼跡文学に属するものを各一作品ずつ取りあげ、それらをどのように指導するか、という観点から分析した。第三部第一章では、小学校六年の教材として採録されている今西祐行「ヒロシマのうた」を論じている。本作は戦争や原爆を教える教材として教科書に採録されているが、国語教育の領域においては原爆の「物語化」がされ過ぎているという批判を浴びることも多い。本論では、そうした教材としての限界を指摘する声に反論すべく、作品の構造分析を行い、むしろ、これまでの戦争文学とは異なる教材的価値をもっていることを指摘した。第二章では、中学校国語教材の定番とされる井上ひさし「握手」を取りあげ、国語教育における教材研究や実践報告のなかで、なぜこの作品が「心の交流」や「献身」といった偏ったテーマから読まれるようになったのか、そうした固定化した読みを超克することは可能かを検討した。具体的には、この作品の根底に「戦勝国の白人」／「敗戦国の子供」という対置構造があることを指摘し、言語とナショナル・アイデンティティのありようを再検討することができる教材という提案をしている。第三章では、高校教材として教科書に採録されている太宰治「トカトン」を取りあげた。この作品は教科書採録にあたって、ストーリーの重要な部分を削除しているが、本論ではそうした編集行為が「トカトン」の読みを特定の方に誘導することを指摘し、現在の高校生が教科書版「トカトン」を通して日本の戦後空間を想像するための方法を考えている。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論は、これまで日本近代文学研究の領域において広く用いられてきた戦後文学、あるいは占領期文学といった概念を焼跡文学という概念に組み替え、空襲や建物疎開によって焼跡となった都市の空間的／イデオロギー的な空白性を明らかにするとともに、焼跡を目にした表現主体が眼前の現実をどのように対象化しようとしたかを問題化している。ロマンチックな時間的遠近法によって“空白の記号”として解釈されることの多い焼跡を、あらためて〈いま—ここ〉の文脈から前景化し、個々の表現主体が焼跡を表象するための新しい文体を獲得していく過程を探究したものである。焼跡や闇市を表象する小説、映画、マンガ、批評等を幅広く検証した研究には、井川充雄・石川巧・中村秀之編『〈ヤミ市〉文化論』（ひつじ書房、2017年）、逆井聡人『〈焼跡〉の戦後空間論』（青弓社、2018年）などがあり、特に後者は戦後日本の歴史認識、領土意識の歪みを指摘している点で注目されているが、本論はそうした先行研究の成果に学びつつ、文学表現の可能性に徹底して拘泥し、作品の文体および表現の細部を分析することによって空白という認識の多義性、語りえない空白を言葉で埋めていくための苦闘の痕跡を追ったものである。

また本論は、上記の問題編成をするうえで鍵となる梅崎春生の諸作品を精緻に読み解く第一部、同時代の諸作家が描いた戦後の光景の背後に戦前・戦中からの連続性、国家や民族の空白性を見出だす第二部、現代において語り継がれる記憶としての焼跡を問題とする第三部で構成されているが、焼跡文学というモチーフをひとりの作家から同時代の文学状況に拡げ、それをさらに焼跡の記憶というレベルにまで引き上げることで、表象不可能なものをいかに表象するか？ という文学の本質的な役割を浮き彫りにしている。

(2) 論文の評価

評価すべき点の第一は、焼跡文学という概念を明らかにするうえで最もふさわしい戦後派作家として梅崎春生に着目し、「偽」や「嘘」といった意識にさいなまれる主人公を描いた作品を系譜的に読み解いたことである。また、そうした認識が主人公のみならず、作家自身の文体に対する問題意識でもあったことを論証し、焼跡の光景を目撃した戦後作家たちが自らの作家的方法意識を獲得していくまでのプロセスを正確に捉えており、これまでの先行研究が指摘してきたエゴイズムやニヒリズムといった個の内面とは決定的に違う角度から独創的な分析がなされている。

第二は、平林たい子、武田泰淳、織田作之助などの作品を渉猟し、“戦後空間を特権的な復興の空間として看做さない、書き手たちの存在を浮き彫りにした点である。都市の空白性は単に空間的な意味でのそれではなく、国家や民族の空白性を意味していると指摘し、戦前／戦後の連続性という観点から、焼跡を戦前・戦中からの残滓として読もうとする姿勢は研究論文として高く評価できる。

第三は、焼跡文学という概念のなかに現実の焼跡だけでなく記憶としての焼跡を含めた点である。小・中・高の国語科教科書に採用された戦争文学教材をセレクトし、それぞれの読解を進めながら、敗戦後の日本を描いた物語を現代の児童、生徒に読ませることの意味を検討しつつ、語り得ない記憶をいかにして伝えるかという問題に迫ろうとしている点で、本論は今後には様々な可能性を拓いている。

焼跡文学論という大きなテーマに照らしてみたととき、国語科教科書に採録された教材を扱った第三部が第一部、第二部と異質の内容になっているため、第三部は別系統で論じた方がよかったのではないかと、という意見も出たが、体験と記憶、過去と現代をつなぐ空白性として焼跡を問題化しようとする筆者の方法意識は明確であるという結論に至った。